

## 寅さんと東京

写真は『東京人』2020年1月。表紙に引き付けられ、久しぶりに読んだ — 『男はつらいよ』の第1作公開から50年。確実に厄介なのに愛され続ける男、寅さんが帰ってくる！ 新作の舞台もちろん、葛飾柴又。柴又から上野、金町、高砂へと連なる京成文化圏に着目し、映画に記録された東京をプレイバック。

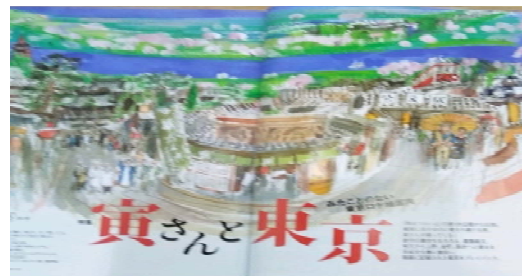
『大阪人』という雑誌も愛読していたが、残念ながら2012年に休刊となった。またレポートしたい。

写真下は画家の藪野健さんの絵。下町の人情に触れ、旅立ち、そして帰ってくる。そうしたシーンを描くのに格好の舞台が、葛飾柴又だった。こぢんまりとした柴又駅。駅から帝釈天へと続く参道には今も、門前町の情緒が残る。その向こうには、広々とした江戸川の土手。「お帰り」と、まち全体が寅さんに呼びかけているようだ。

藪野さんと山田洋次監督の対談「不寛容な時代はこの厄介な男をどう迎えるのか？」の最後の方だけでも紹介しよう。

藪野 『男はつらいよ』は、第49作（『寅次郎ハイビスカスの花 特別篇』）から今回の最新作までに22年間の空白がありました。この期間、私は寅さんを思い出しては、いろいろなことに気づかされました。中でも強く感じたのは、寅さんのような人がいた時代は本当によかったなということです。

山田 『男はつらいよ』の映画が始まったのが、1969(昭和44)年。その頃の70年代半ばまでは、日本人は幸せだったと思います。学生も含めみんな元気で、それなりに収入もあり、夢や希望があった。今は暗いですよね。未来を想像してAIに支配されるかもしれないと怯えている。渥美さんが亡くなる年の春にお会いしたときも、「電車に乗るにも切符の買い方が分からなかったんだ」と嘆いていました。後ろに並んでいた青年が買ってくれたそうですが、それも親切というより、イライラしながらだったと。これはつまりテクノロジーが進化して自分が時代に置いていかれるという悲しみと、世の中が便利になるにつけて、人間の感情が荒んでいくことを表している。昔は駅員さんが改札にいて、鉄で切符をパチンパチンと切ってくれました。どうしてあれがだめなのかと、僕は近頃、本気で思うわけです。



(2019年12月15日)